

## 消えた桧屋根 —失われた職人の物語

現在ではすっかり姿を消した職業のひとつに桧屋がある。大風が吹いた翌朝には、差し桧を買い求める人びとが桧屋の前に行列を作ったという風景もみられなくなって久しい。

浦河に桧屋根が登場するのはかなり古く、明治以前のことである。手元にある「日高開発功労者事蹟録」（昭和三年刊）によれば、すでに明治四年、天草・大村からの移民団が浦河に上陸したときに、役所（旧松前藩の番屋と開拓使出張所）と二軒の民家が桧屋根だったと記されているし、「杵臼村記録書」（明治三十年録）には、入植者の家も翌々年には草葺（ぶ）きから桧に変えられたとある。

しかし浦河に本職の桧屋が現われるのは、明治三十年頃。遠藤初次郎（明治六年生まれ、富山県出身）が大通五丁目で店を開いたのが始まりだという。東京の桧屋に弟子入りして技術を身につけた初次郎は、虚無僧（こむそう）となって尺八を吹きながら北海道各地を巡りあるいていた。やがて浦河へ足を踏み入れた初次郎は、素人桧屋政田吉蔵の娘キクヨを妻に迎え、道一本を隔てて向かい側に桧屋をひらいたのである。

当時浦河の周辺には、静内に“川又”という桧屋が一軒あったきりで、初次郎のもとへ他所（よそ）からも泊りがけで桧を買いにきていたという。このため景気はよく、妻の親戚である菅原新一、菅原某の二人を職人として内地から呼び寄せたほかに、後に浦河で桧屋を開くことになる小林 茂、三浦忠勝、広沢繁蔵など十一人の弟子を取り、近在一帯の屋根葺きを一手に引き受けていた。明治三十年頃から、明治末年初次郎が家族とともに樺太へ渡るまで、町内で建てられた家の屋根はすべて彼の手によるものである。

その当時の家の多くは、桧葺きといっても“長桧”を重ねて石をのせたものや、桧皮葺（ひはだぶき）といって桧の皮をのせた家さえあった。長桧というのは三尺も五尺もあるもので、素人が作るとどうしても厚くできて、重ねると釘が打てない。しかし本職の桧屋ができる前は、こうした素人桧屋が替わりを務めていたのである。

さて桧作りはまず原木を山から運び出すことから始まる。遠藤初次郎は向別のタネベツとラムシに自分の山を持っており、そこから山子（やまご）を使ってエゾマツやトドマツを切り出していた。この原木を見きわめる目を持つことは、桧屋を営む上の大切な要件で、太くて素性が良く、節のない物を選ばなければ、苦労ばかり多くて良い桧には仕上がらない。馬車も、運搬用の道もない時代である。ダンコ馬といって、馬の鞍の両側に三尺に切った原木を数本くくりつけて運び出す。一頭の馬の尾に次の馬を引くロープを結びつけ、その後にまた馬をつなぐという方法で、ひとりの山子が何頭もの馬を引いて山を下りた。家の前には、こうして運び出された木が山積みしてあり、杉立某という“胴木切り”専門のじいさんが鋸を引いていた。力のいる単調な仕事である。近所の子もたちが学校帰りに通りかかると、決まって冗談を言って笑わせる。それが彼の息ぬきだったのだろう。その光景を高木アサはよく覚えている。一尺づつに胴木切りされた木は、初次郎と弟子たちによって右図のような手順で一分弱（約三ミリ）の薄い桧に仕上がっていく。一枚の木片を二枚に、さらに二枚にと繰り返し割っていくさまは、まさに職人技である。

桧屋の仕事は天気が勝負。朝早くから空模様をうかがいながらその日の予定分の桧を割り、食事

もそこそこに家を出る。早飯、早糞は鉄則で、ボヤボヤしていると親方や先輩にどやされる。小林勇雄が柵屋をしていた父から聞いた話に、種馬牧場（後の種畜牧場）の厩（うまや）の屋根を葺いたとき、前日に大雪が降った。「それ、雪下ろしだ！」と五丁目から竹箒（たけぼうき）を担いで走り、一日かかってやっときれいになったかと思うと、次の日また雪が降った。雪下ろしだけで丸二日を費したのである。そうかと思えば、屋根の葺き直しをするのに、全部の柵をはがしたところで大雨になったこともある。こうしたハプニングにはずいぶん泣かされたものだという。

柵屋の仕事は腕の違いによって成果が如実に現われる。口に含んだひとにぎりの釘を器用により分けて、先の方からプツと一本取り出す様はまるで手品のようで、知らない者は金槌の中に釘が入っているかと思ったという。中には一秒間に一本の割り釘を打つと豪語する者がいたりする。

釘をいつも口に入れているせいで歯は悪くなり、口の中は荒れて、味噌汁も飲めないくらい痛むが、泣き言など言っていない。職人氣質の男たちの競争意識は強く、酒が入るとそれがこうじてしばしば喧嘩になった。

「お前の柵の葺き方はいったい何だ」

「なにィ、ロクな柵も割れなくせしやがって」

茶碗が飛び、つかみ合いにもなる。しかしそれも今にして思えば華やかな時代であった。

明治四十五年、初次郎は柵屋をたたんで樺太に渡るが、弟子たちは浦河をはじめ各地に散らばった。日高管内はおろか、遠く樺太、網走で柵屋になった者もある。こうして全盛を極めた柵屋も建築工法の急激な変化と、防火上の理由から急速に衰退してしまう。彼らの残した足跡は、今では古いトタン屋根の下にわずかに姿をとどめるだけである。

[文責 河村]

#### 【話者】

遠藤 一郎	浦河町東町ちのみ	明治三十二年生まれ（平成三年十月没）
高木 アサ	浦河町堺町西	明治二十七年生まれ
小林 勇雄	浦河町大通五丁目	大正十四年生まれ

#### 【参考】

北海道開拓記念館研究年報第十四号	昭和六十一年	北海道開拓記念館
北海道を探る六 個人の生活史	昭和五十九年	北海道民族文化研究所